

# 大瓶猩々

季は	地は	後	前
九月	唐土	ワキ 前に同じ	カウフ う
		シテ 猩々	シテ 童子

ツレ（六人）伴ふ猩々

「是は唐かねきん山の麓に。かうふうと申す民にて候。我親に孝有るにより。次第々々に富貴の家と罷り成りて候。又此間何処とも知らず童子数多来り。某が酒を買ひ取り候。今日も来りて候はゞ。如何なる者ぞと名を尋ねばやと思ひ候。

シテ一声  
「わたづみの。そことも知らぬ波間より。顕はれ出づる日影かな。

ワキ詞  
「今日の市人は何とて遅く来り給ふぞ。

シテ詞  
「嬉しやさらばと内に入り。いつもの酒を愛しけり。  
地  
「琴詩酒と。聞くも隔てぬ友人の。く。いつもか  
はらぬ酒功贊に。酒を愛せし来し方の。人の心に  
ひきかへて。是は琴にも盃。詩を作るにも盃。唯  
酒飲の友ばかり。恥かしやさこそげに。市人の我  
を笑ふらん。

ワキ詞  
「此程は何処の人とも弁へず。今日は御名を名乗り  
おはしませ。

「今は何をか包むべき。是は濤陽の江に年久しき。  
猩々と云へる者なるが。御身親に孝有るにより。  
天のあはれみ深ければ。泉の壺を与へんなり。疑  
ひ給ふなかうふうと。

地  
「夕べの空も近ければ。く。暇申してさらばとて。  
行くかと見ればさにぬりの。面も赤く様かはりて。  
市人に立ちまぎれて。跡も見えずなりにけり。  
跡をも見せずなりにけり。 (中入)

地  
「御酒と聞く。く。名もすさましく秋の来て。  
暖め酒と菊月の。頃もはや紅葉の。はや色付くか  
一重山。薄き紅葉ば色々の。菊の盃すゑ置き。秋  
の夜深く待ちけるに。

ツレ  
「不思議や此友の。

地  
「不思議や此友の。来らぬは覚束な。沖に向ひて我  
友の。など遅なはり給ふぞや。急ぎ給へ友人。  
又猩々は顕はれ出で。く。彼かうふうに。妙

なる泉を与へんとて。波間を分けて渟陽の江の。

汀も近く顯はれたり。

地 「頃は秋の夜月おもしろく。く。汀の波も更け静まりて。数多の猩々大瓶に上り。泉の口を取るとぞ見えしが。涌き上り涌き流れ。汲めどもく尽きせぬ泉。何れも戯ぶれ。舞ふとかや。 (中の舞)

シテ 「菊の露。積りて尽きぬ此泉。

地 「尽きせぬ宿に。

シテ 「返し受け置き。

地 「是までなりや。醉ひ伏す夢の。覚むると思へば又起き上り。命長柄の柄杓の酒を。道俗男女に残さず進め。元の泉に收まりければ。何れもく。足もとはよろくよろくと。繰言茂く。千秋万歳君千代までと。く。栄ふる御代こそめでたけれ。